

我らの時代 清水哲男

新宿の空に
飛行船が浮かんでいる

退屈していた子どもが
いちはやく指さして見上げる
つられたように老いた男が
退屈そうに見上げる

地下道から出てきた若者たちは
気づかずにコーヒーを飲みに行き
何人かは気づいても
やはりコーヒーを飲みに行ってしまう

見上げているわずかの人たちは
雑踏のこぼした血液のように
凝固しはじめ黒ずみかけて
徐々に下垂してくる内臓のせいで
腰のあたりに堪え難い重さを感じる
そんな人たちがいることを

飛行船に気づかない人たちは
やはり気づかない
誰もが自分と同じように思えるので
ただ憎らしいとだけ感じている

これが我らの老年時代なんですよ
ひとりの老人が飛行船から目をそらした
見上げていた人の大半は
しかし彼のつぶやきには気がつかず
重い腰をさすりながら
これが俺の今日という日だったのだと
日記に記すことになる

やがて点在し凝固し黒ずんだ人たちが
時代の片隅に散ってしまうと
新宿の空はまた
鳥籠のように雑踏を吊るして べもない。

二〇〇一年九月＊風の盆に行く

瀬尾育生

1

風の盆の踊りを見てみると、いくつかのことがすぐに心にふれてくる。フリの異様さ。だれでもすこし練習したら一応は真似できるような単純な身振りだけからなっているのに、一目見ただけでそれが和洋のどんな踊りでも見たことのないフリだとわかる。同じ曲にあわせて女踊りと男踊りがあるが、それらは同じフリになっ

ていている部分と違って踊り手がある。また、リズムに身振りをのせてゆくとときのアクセントのつけ方が他の踊りとまったく違うと思う。手と足と、胴の傾斜と、重心の微妙な移動からなるこんなに単純な身振りが、どうしてこんなに異質な印象を与えるのか不思議だ。衣装は女性

が羽二重のピンク、男性は黒の、なんというのか「奴さん」の恰好をしている。踊り手はいずれも深く折られた編み笠をかぶっていて、口元くらいしか見えない。演奏者たちは紺の浴衣を着ている。

三味線と太鼓と胡弓からなる伴奏のつけ方が不思議だ。そのテンポの遅さ。そしてポロン：ポロンとかトン：トンという間遠なりズムの刻み

方が、一種の催眠効果を持つような気がする。胡弓という、異国風の楽器が（この踊りは比較的新しいものだから、そのはじめから胡弓はすでに「異国風」の楽器だったにちがいない）何故選ばれているのか不思議だ。これらの楽器が水に弱いものであること、それから女性の踊り手

の衣装が羽二重であることから、少しでも雨が降ったら祭りは中止される。このことはとても厳密に守られている。越中おわら節の歌い手の声が不思議だ。おわら節がすべてこんな風に歌われるのではないと思う。八尾では、それが極端に高い声で歌われる。ちょうど男の声域の上限を超える高さ。だから、歌の半分は地声、半分は裏声で歌われている。踊りの「隊列」（と地元の人が呼んでいた）は各町内から一つずつ出

る。全部で十一の町内がある。十数人から数十人くらいの一団で、女二列男一列になって踊りながらゆつくりと進み、その後ろに奏者たちがつづく。これは「町流し」と呼ばれていて、神社や控え所や路地からふいに出てくる。そしてひとしきり町内を進んだ後、ふいに消える。いつどこでこの「町流し」に会えるかわからないから、一晩中町を歩き回っていても、運が悪いとまったく踊りの隊列に出会えないことがある。

2

この夏の終わりに、大学時代の友人たちと、その奥さんたちをまじえて全部で七人、富山の八尾という町へ風の盆を見に行った。観光バスで行く二泊三日のツアー旅行に加わったのだから、いろんな見ものが前後に一杯詰まっていた。旧中山道の宿場町、長良川の鵜飼、これが第一日目、次の日は太平洋側から中央山岳地帯を超えて日本海側にはいつていった。分水嶺を超えたあたりから、村や町の様子とはとぜん生まじめな、地道な、いくぶん単調で均質な表情に変わり、同時に花々や草の色は鮮明に、耀くような色に変わり、それがそのまま富山とか金沢という大都市にまで続く。「表日本」と「裏日本」がこんなにはつきりと表情を変えることに、今回始めて気づいた。白川郷の合掌造りを見て、富山の

ホテルで早めの夕食を取り、またバスに乗って八尾の町に向かった。車中、旅行社の添乗員の青年はどうしたら町流しの踊りに出会えるかいろいろ教えてくれた。町の角などでなんとなく町の人たちが集まって、ざわざわした雰囲気になってくる。それを察知したら、そこを離れず辛抱強く待っていること。とくに一番奥の諏訪町というところは石畳のとても美しい町並だ。ここで踊りが見られたら最高でしょう、などと。

町外れの、バス会社の駐車場から日の暮れかけた道を歩いて町へ入ってゆくと、井田川という、河岸に広い草地のあるきれいな川があつて、その向こうに小高くなつた丘があり、八尾の町がその丘の上に見えてくる。川のこちら側から見ると、向こう岸全体が高く切り立った大きな舞台装置のようにみえる。夕暮れで家々はみなくすんだ色をしているが、くすんでるのは夕暮れのせいばかりではない。町そのものがピカピカ、キラキラしたもの

だがとうてい旅行社の青年が言うようなわけには行かなかった。坂道をのぼる前にもう人ごみにまぎれてK君が行方不明になってしまい、残された六人は町の狭い商店街にはいったが、情報収集力抜群といわれるW夫人が町の人に、この角のところに七時には踊りが通るから、ここで待っているといいですよ、などと聞いてきて、そこで待っていたのに、いつまで待っても何もこない。そうこうするうち道の反対側で人だかりがしてフラッシュが光る。偵察にいつてこようといて、ぼくが飛び出したのだが、偵察どころではなく、いつのまにか人波にぎゅう詰めになってしまつて、踊りの行列の最後尾にまで押し出され、ただもうじりじりと前進するしかなかった。

行列の後尾についている演奏者たちの体越しに、踊り手たちの仕種が後ろ向きに見え、それが町流しとの最初の出会ひになった。青年が、押し寄せる群衆に向かって叫び続けている。この道は脇から通り抜けできません。急ぐ人は横の道にはいつてください。前へは廻れませんか。後ろから押したつて絶対見えません。「絶対無理ですからあきらめてください」と。

町の人たちから見れば、ふだん八千人くらいしか人口のない小さな町にとつぜん一晩十万人も押し寄せてくるこの群衆にそんなに親切にしてやる理由はないのだ。アイスクリ

ームを買うとか、屋台でたこ焼きを買うくらいで、この町には宿泊施設はほとんどないから、それで町が潤うというわけでもない。かえつて大量の移動トイレを用意したり、流しの踊りに出会えないかもしれない観光客のためにわざわざ特設ステージを作つて、そこで踊つて見せたりしなければならぬのだから、これは迷惑な話だと言つたほうがいいだろう。観光客の群衆は風の盆の性格を完全に変えてしまつた。町の人たちはそれを腹立たしく思う権利があると思う。だからどこに「流し」が出るかなんて絶対教えてくれない。わざと間違つたことをおしえて、ちょっと観光客をおちよくつてみたくなるとしても無理からぬことである。

ようやくその行列が解けて、ぼくが六人が待つてゐるはずの場所に返ると、こんどは行方不明になつたはずのK君だけがそこにいて、他の連中はそれぞれに踊りをさがしに散つていた。あとはK君と二人で町をあちこちさ迷い歩き、いくつもの、それぞれに雰囲気とフリの違う踊りの列にであつた。ある町内では恵比寿様のように満面に笑みをたたえたおじいさんが、今日はお客さんたちのまえではじめて親子競演だよ、などといつて踊る息子（といつても五十くらい）の横で太鼓を叩いている。そこでは踊り手たちは傘をかぶつていなかったし、みんな笑顔で「アンコール！」などという声にこたえた

りしてゐた。かと思うと、整然と、群衆たちを圧するかのように、ほとんど「憤然と」前進してくる隊列もあつた。

3

女踊りと男踊りの「重なり方」と「ずれ方」にはきつと性的なコノテーションがあるのだと思う。踊り手は正規には二十五才以下の男女に限られてゐる。それが女二列男一列の隊列を作つて流してゆく。たとえばこんな場面を想像してみればよいと思う。夜更けの閑散とした道に「町流し」がやつてくる。胡弓と太鼓と三味線の音で、もう眠りかけていた少年が寢床から起き出して二階の窓から道を見下ろす。すると、自分よりすこし年上の少年少女たちが踊りながら暗い道をやつてくる。それを見た少年は、きつと来年か再来年になつたら、自分も異性とならんで列を作つて、こんな夜更けに踊り歩くことになるだろう、と想像する。そう考えただけで、なぜだかよくわからない胸騒ぎを覚える、というよう

な。

踊りのフリも曲も「陽気」などころはない。はつきりと「陰気」である。たとえば踊り手が両手を一杯に広げる。そして両方の掌を下向きにカクンと折る。こんな暗い仕種があるだろうか、と感じる。それから道端に立つて行列を眺めているとき

に、露払いのような青年が駆けて来て、開いている店に「ここは明るすぎなんだよ。ちよつと半分店をしめてよ」と言っているのを聞いた。あたりは暗くなければならぬ。感情は隠されなければならぬ。深い編み笠で顔が見えないということもあるが、どこにも感情の「解放」という要素はない。性的なコノテーションとはいつても、それは決してエロスの「解放」ではない。むしろ感情を抑圧すること、殺すことが主題になっていると思う。

踊り手の顔が見えないことは全体にとでも不穏な印象を見るものに与える。「町流し」が進んでくるのを前方から見ると、整然と隊列を作つて、とても不穏なものが道をやつてくる、という感じがする。この印象が何かに似ていると思うのだが、とりあえず思い浮かぶのは、ヘルメットと覆面で顔を覆つたデモ隊がこちらへ進んでくるときの感じだ。

おわらの歌い手の声の異様な高さは、カウンターテナーの声に感じるものと同じだ。カウンターテナーの声は、同じ音域であつてもアルトの女声とは違う。つまりある「境界」を震わせているという感じがともなつてゐる。何と何との境界かという、男と女の境界、それから死と生との境界。それともう一つ、この異様な声の高さは、その歌い手自身ではない何か別のものがそこで声を発している、という感じを与える。

つまり何かが乗り移っているような気がする。男に女が、生者に死者が乗り移っている。そのために声が引き攀っているのだ。

この踊り全体が持つ不穏さは、押し殺された殺意、押し殺された狂気のようなものを感じさせる。まったくの当て推量だが、これには政治的な背景があるかもしれない。八尾町は農村ではなく、浄土真宗聞名寺の門前町である。風の盆の歴史は三百年程と言われているが、さらにすこしさかのぼると、この地方には一向一揆があり、五木寛之氏のいわゆる「百年の宗教コミュニケーション」があった。その残響がこのなかに聞き取れるかもしれない。なぜ胡弓のような楽器が使われるのかという「異質さ」も、そこに何か政治的な意味を直観させる。「町流し」が十数人ないし数十人の規模でふと現れてふっと消える感じも、抑圧、潜伏しているものの存在を予感させるような気がする。旅行社が用意してくれたチラシにはこう書いてある。《起源については古文獻をひもといてもはっきりしませんが、口伝には、八尾町の開祖米屋小兵衛の子孫が保管していた町建に関する重要秘書書の返済を得た喜びの祝いとして、三日間、歌舞・音曲は言うに及ばず、その他いかなる賑い事でもとがめられないから面白く町内を練り廻れというおふれを町役所より出し、俗謡・浄瑠璃・その他思い思いの催しをなし、三味

線・胡弓・太鼓・尺八などの鳴り物に和して昼夜の別なく町内を練りまわったのに始まり、この祭日三日が孟蘭盆三日に変わりやがて二百十日の厄日に豊穰を祈る風の盆に変わったと言われています。》

現在では流しの踊りを群衆が取り囲んでいる。しかし踊り手はそれを断固として「無視」しているように感じられた。観客との間には絶対的な懸隔があつて、踊り手は群衆を意に介さず、道一杯に広がつてただまっすぐに進む。この場合観衆はたんなる邪魔者である。私たちが見ているとき、踊り手の女性が「そこ邪魔で踊れません。どいてください」と叫んだことがあつたが、それは決して声を発しないはずのものがとつぜんナマの声を発したようで、すこし異様な、だがとても納得できる言葉だつた。逆に言うところのことは、この踊りが決して観客と交わらないはずのものであること、もともと観客など想定してないものであることを語っているように思われた。

とはいっても、この踊りにはどこかに本質的な群集性がある。押し殺された陶醉と催眠と夢見心地があるのだ。だがそれは演技者と観客との間に成り立つのではない。潜在している大きな集団的な狂気のようなものがあつて、その「徴候」のようにしてこの踊りが出現している、という感じである。

4

この文章を書く前に、八尾という町の歴史やこの踊りのなりたちについて、一度よく調べてみたいと思つていたので、この旅行から帰つて一週間後にアメリカで事件が起こつたので、なんとなくそれどころではない気分になり、そのままになってしまった。だから、まだよくわからないことがたくさんある。

その夜はバスで金沢に移動して駅前のホテルに宿泊した。八尾のバス駐車場には数百台のバスがまた次々に入つてきて群衆たちを乗せていった。夜の路上に数キロ、バスのヘッドライトが見渡す限り連なっているのが見えた。これらのバスは渋滞して八尾を出るまで二時間ぐらい、つまり夜半過ぎまでかかるのだそうだが、でもわれわれのバスは地元のバス会社の観光バスで、八尾に操車場を持つていたから、そこから逆方向に町を出て、おかげで十二時には金沢についた。ホテルの部屋にビールなど持つてあつまつて、興奮がさめなまま何時間も、祭りのことを話していた。ここに書いたのは、そのときみんなが話し合ったことだ。

この文章を最初に書いたのは十年とすこし前。アメリカで起こった事件というのは9・11のことである。自分が書いた文章は、たいていの場合、二年もたてば読むに耐えないものになる。一つの文章が今でもなつ

かしく読めるのは私にとって稀なことだ。この文章はその稀な例外の一つだ。旅に同行した私の古い友人たちのうち、二人はすでにこの世にいない。なつかしきは文章のせいではなく、彼らのせいなのかもしれない。



○創刊特集「いまを生きる」

浅野言朗

〈凹み〉について

生物に関する本を読んでいると、誰もが生きるのに必死と感じる。彼らは生存の意味を、生きるために生きて自分の遺伝子を残すことに特化している。捕食と繁殖（生殖）それから外敵からの防衛のための工夫を積み上げる。

人間について考えると、相反するように全活動に占める捕食と生殖と戦闘の割合を下げることで、生物学的生存条件の拘束から逃れることが文明の進歩である、と感じる。実際に文明国といえるほど、食料の生産に携わる第一次産業従事者の割合は下がり、少子化が加速度的に進み、平和的な装いを纏う。生物学的生存とは直接関係のない営為、創造の起点とはかけ離れた所作、自分で造るのではなく他人の創造や行為を搾取しながら演出し伝達する才能：に富や名声は集中しているように見える。また、戦闘的な男の本能は徹底して封じ込められて、社会的な制裁の対象とされる。

日本は、捕食や繁殖それから外敵からの防衛のいずれにも関心を失った国であり、必然的に衰退するだろう。目的とするべき本質的な基盤を後退させ、過程に過ぎない打算的な

駆け引きが肥大化して、そこに労力の大半を注ぎ込んでいる。

昨今、婚活がブームであるが、男女の関係は売り手と買い手の間の市場原理に属するものとなり、投機的な様相を呈している。双方が相手への条件を吊り上げ、交渉の技術の意味に洗練させた結果、冷戦時代の軍拡競争のようなことが起こり、使う当てもない戦術や兵器を量産している。戦略は長期化するので、遠からず成婚の年齢は出産可能年齢を常態的に越えるだろう。ブームは所詮廃れるが、その下らなさに賢明にも気付いて、最初から市場に参加しない者も増えている。

けれども、例外もあるようだ。〈凹み〉の中に互いを迎え入れるような、必然的な夫婦を最近何組か見かけた。人はそれぞれ周囲に〈凹み〉のような領分を持っていて、その大きさや曲率が合う相手とうまく寄り添えるらしい。この話は敷衍される。例えば災害に乗じて、時代の危機を大局的に叫ぶ人には例外なく邪な意図がある。〈凹み〉は、個体としての生存条件と共鳴する何かである。やはり、身の回りの〈凹み〉の考察から始めるのだ、と気付いてみる。〈凹み〉の考察こそ、poesyなのだと思う。



1972年東京都生まれ。2005年、浅野言朗建築設計事務所設立。
詩集…第一詩集『凹み』／窓の分割』（2008年、ミッドナイト・プレス）。
建築作品…「森の階調」（2010年）ほか。

久谷雉 つまらない

二〇一一年というのは詩の実作者としての私にとって、実につまらぬ年であった。おそらく二〇一二年、二〇一三年も同様にこのつまらぬ状況は続くであろう。災害の前からもともとそうだったのか、それとも後からそうなったのかは見当がつかぬが、老いも若きもどことなく、自らの言葉が身にまとう説教くささに対する恥の意識というのが薄れているようだ。そもそも〈恥の意識〉などという言葉を持ち出す時点で、私自身もその仲間なのかも知れないが。

〈いまだから書き手が書き手として声をあげなければ〉（被災者に寄り添うものを書かなければ）、といったタチの悪い同調圧力の台頭には、ほとほとうんざりさせられた。運動

家になりたけりや、勝手になつてくれればいい。しかし、他人が運動家にならないことを咎めるような言説は——また、それによって連帯を図ろうとするのは——勘弁してくれ。書き手それぞれの〈書く〉リズムを、あるいは方法を尊重できないほど、日本の詩の世界は未成熟だったのか。おっと、またまた説教くさくなつてしまつた。〈怒れる若者〉になりうることは、現在ではむしろ、〈空気を読める〉ということをも意味しかねないのだから、あやうい。

そもそも今回の編集部から与えられた「いまを生きる」というテーマ自体、どうも書き手がこの類の同調圧力に乗ってくれるのを——自覚しているのかしてないのか——期待しているフシがあるような気がしてならない。あまりにも漠然としているので、テーマを出した側にも出された側にも、それなりに逃げ道はあるのだけれど。

時代を分断する〈線〉となりうる出来事は、震災以前にも以後にも無数に引かれている。また、それによって死んだり、あるいはそれに匹敵する状況に追い込まれた人間もいるだろう（数の多寡は問題にはならない）。むしろ、その〈線〉の積み重ねを引き受ける、いや、その存在に對する自らの鈍感さを引き受けよう

○創刊特集「いまを生きる」

とする仕事に私は可能性をみる。一本の（線）を祭りあげることには力をそそぐのは、実につまらぬことだ。



1984年、埼玉県深谷市に生まれる。
2003年、第一詩集『昼も夜も』をミッドナイト・プレスから出版。2004年、第九回中原中也賞受賞。詩集『ふたつの祝婚歌のあいだに書いた二十四の詩』思潮社、2007年。

小林 レント 現在の墓碑

莫大な人口と物が流れてゆく過密住宅街において、個の生活が外界と干渉しあうふくらみは、最小限まで狭められている。航空写真の描きだす家々のすきまは、壁一枚の境界線に収束しようとしている。至近距離で顔を合わせる不快感にカーテンは閉めきられ、界限は意味を結ばない音像に還元される。隣家の切れぎれの言葉と歓声は、管理者ごしに苛立ちをぶつける電話一本に沈黙を凝らせ、さらに不気味なものとなる。垣根の距離と透過性にはここにはない。物質的密着の軋みが精神的断絶に直結するのはラッシュアワー同様

だ。孤立した現在形の生活の微粒子は窓を持たず、区画のうちに飽和しきったかに見える。しかし同じ飽和のゆえに、建築のぎりぎりの開きには、人の手の入らない領域が結晶する。静止した境。光のいらぬ植物と虫達がわずかな土を争いつつ生きてゆく空間。柔軟な猫が世界から消えてゆくための通路。わたしの帰りに行くべき方向の九十度横に、都市の時間から取りこぼされた昼夜がある。かつて往来のあったことを示すドアは壁を向いて閉ざされ、プラン

ターのなかで婦人の一季節が立ち枯れている。いつか家具の隙に滑り落ちてしまったメモ書きのように、それをまなざすのが何年ぶりだかわからない商品のゴミが埃を帯びている。処分場へ流れる名詞の洪水のへりに座礁した物たち。すばやく目移りする日常のすぐかたわらの死角に、記憶は山道の廃車のように打ち捨てられてある。それは単に忘れられていた些細な過去であるばかりだろうか。廃物は未来における今日の痕跡、懐かしいものとしての今ではないのか。かつて声の行き交った境域に、縁無き生活の墓碑が転がっている。いつかの日には近隣の表札にまして親しかったはずのその呼び名はもはや思いだせず、夢の文字のように掠れてよく読めない。そのとき忘却にさら

されているもの、間隙に抑圧されつつ露開し縫合を拒むものは、外傷を負いつづける現在時であるだろう。



1984年生まれ。詩集『いがいが』（ミッドナイト・プレス）

添ゆたか 欲にまみれる

そういえば「生きたい」と思わなくなつた。すでに生きているのに、わざわざ「生きたい」と思うのもおかしい話だ。生きていないから「生きたい」と思う。生きているから「死にたい」と思う。だからといって「死にたい」わけでもない。「生死」についてサッパリ考えなくなった。

10代の頃は「生まれた意味」だの「生きる理由」だの「自分の使命」だの、それはそれは大層立派な悩みで延々と苦しんだ。「答えはない」という答えを受け入れてから、随分と楽になった。

せっかく頂いたテーマをぶち壊すが、私に「生きる」という意思はない。生きているから生きているだけで、「どうせ生きているなら楽しいほうがいい」と思うだけだ。美味し

い物を食べて、好きな服を着て、友達と会って、家族がいて、恋人と過ごす時間が満たされれば、それでいい。それでいいと言っても、わりと贅沢なことを望んでいるが、それ以上もそれ以下も望まないし、望みはきつちり望む。だって、どうせ生きているなら楽しいほうがいい。

「どうせ死ぬ」、なんて前向きな思想。私は好きに生きる。「欲にまみれて生きる」と断言する。

このように自分のことしか考えていない人間が、「時代」や「世の中」について考えているわけがない。「社会」や「歴史」、「政治」など、最も苦手な言葉だ。

「世の中が」と言われても、何のことを言っているのか、よくわからない。一人一人の人間がそれぞれ存在しているだけで、それを「世の中」とまとめられても、うまく理解できない。

ここまで身勝手に書いたわけだが、「この時代」には満足している。いくらでも自由に言葉を書ける環境でありながら、あらゆるものは書き尽くされている。新しいものは、もう、何も生まれない。誰でも何でも書けるのに、誰も何も書かなくていい。だからこそ、書く。自分のために。偉そうな物言いだだが、要は「時代なんて知るか」というのを、ゆるされ

○創刊特集「いまを生きる」

る時代だということ。
楽しむしかない。



1989年生まれ。それほど仲良くない人に「石田純一がタイプです」と真顔で言ったら本気で驚かれ「冗談です」と言うタイミングを失うが、好きだから別にいい。

元山舞 いまを生きる

いまを生きるというのは、必死に「自分の為に生きる」ことなのだと思う。

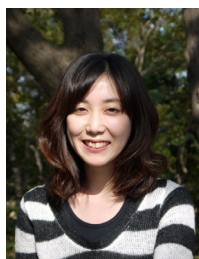
この原稿を書いている今、辺りでは桜が咲き始めている。
道ばたで見知らぬ横顔が桜を見上げており、そこにある美しい景色に見入っているのだしたら私もぜひその景色を見てみたい、と感じて気付いたことがある。はっと心を奪われる美しい空間を観ることこそが、生きている「実感」の本質ではないか、そして他人と「感覚の共有」をできることこそが、本当に素晴らしいことなのではないかと。

日影の道から日向へ出た瞬間や、

風が木の葉を揺らす音を聞いた時、私は天使が落とした羽になでられたような柔らかい気分になる。風が吹いていないのに空を見上げると雲が随分と早く流れている時、空が高過ぎて動けなくなる。

私よりもあまりにも小さな蟻が私の前を横切る時、猫がまん丸な瞳で様子を伺いながら本当に少しだけ前足をずらした時、私は自分が何者なのかなぜここににいるのかを見失い、そこにある美しい命に見入ってしまふ。

「いま」は、過去の失敗や浅い考え方をきちんと訂正し、多くの絶望や悲しみを乗り越えることが求められている時代だと思う。向き合うという強さを持つ為に必要な強さというのは、そもそも生きる喜びをエネルギーにしていると思う。だから、いい笑顔でいまを生きていきたいと、そう感じています。



1984年生まれ。優しい気持ちのまま生きていきたい。趣味は写真撮影と映画鑑賞。若が好き。

中村剛彦 犬とパスカル

深夜、泥酔しながら煙草に火を点けようとしても風が強くてうまくいかない。とても寒い。さっきまで眠りかけていた終電にマフラーを忘れたことに気づくが、もうどうでもいい。いまは何とか家に帰りたい。ヘッドホンを劈くマリア・カラスの歌声が私を世界最強の男に変えるが、いま私は生きているのだろうかと後ろを振り向くと、脅えた影が風に捲られ垂れ下がっているのが見える。

歩みを早める。姿勢を正し、暴風の中を爽快に潜っていく。闇はそのまま私を受け入れる。「私たちは知らぬ間に孤独」とマリア・カラスが絶叫している。そうだ、そうだ、と私は何度も頷きながら帰るべきでない家へ、闇へ吸い込まれていく。

知らぬ間に鉄鎚が右手に握られて、この道を幼い頃何度も往来しながら、何度も家々の壁を破壊しことを思い出す。行方不明になった親友の家の門に咲く梅の花の裏側に、あいつが子どものまま浮いている。大好きだった少女の部屋の窓にはまだ明かりが灯っている。ここでいつも見上げて勃起していた。

「我が家」の玄関を開け、ただいま、

と呟くと、おかえり、と筈のように自分の声が返ってくる。居間には老いた両親と太った兄が真っ白い顔をして食卓を囲んでいる。私は二階の部屋に真っ直ぐに向う。犬が尻尾を振っている。ここは幼い頃に私が繋がれていた部屋だ。ボニー、と抱きあげる。これでいい、と鉄鎚を床に落とす。

「人間は、もし気が違っていないとしたら、別の違い方で気が違っていることになりかねないほどに、必然的に気が違っているものである。」(パスカル『パンセ』四一四)
十八歳から読みつづけたこの書をそろそろ捨ててもいい。著者が死んだ歳に私も至ってしまったからだ。私は犬と家を飛び出し、闇を走っていく。ヘッドホンからは激しい金属音が聞こえる。半月の下、私は青い炎の松明を掲げて、今日も犬を追いかけてながら家の周りをぐるぐる走りまわっている。



1973年横浜生まれ。詩集『壇の中の炎』(ミッドナイト・プレス、2003)。詩集『生の泉』(同社、2010)。同社ホームページで詩論「甦る詩人たち」連載中。
<http://www.midnightpress.org/>

創刊特集「21人に聞きました わたしの好きなことば」

ゆったりまったり
赴くままに

倉本さとみ 37歳 会社員



蝟集と反芻

福本順次 63歳 作業員



ガテン、ボタン休、好きな一句

夏蜜柑いづこも遠く思はるる

／永田耕衣

小川賢吾 39歳 フリーター



大丈夫

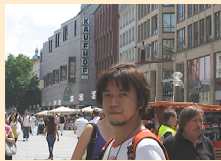
松谷美紗 20歳 学生



菅原秀一 40歳

印刷

going my way



悩殺

黒崎渉

本厄

ペラゴロ虚業

「ひとは、そこにただ魔法だ。」(片山令子
「魔法の中で」)『ブリキの音符』アートン、2006(より)

宇佐美奈麻子 大学院生

生かされて

吉田一省 41歳 会社員



愛は自由、自由は愛

(Love is free, free is love)
(ジョン・レノン)

ナトリイ・メグ 25歳

シンガーソングライター



永遠の旅人

佐々木京子

61歳 NPO法人代表

& スポーツプログラマー



「こころで見なくちゃ、
ものごとはよく見えないって
ことさ。かんじんなことは、
目に見えないんだよ」

(サン・テグジュペリ『星の王子さま』

内藤濯訳、岩波書店)

小林葉子 1961年生まれ 主婦



創刊特集 「21人に聞きました わたしの好きなことば」

生死の間に境はない

桑原滝弥 40歳 詩人



撮影／小沢吉一

過去／今への

アイデンティティ

平将文



「one for all all for one」
(ひとはみんなのために
みんなはひとりのために)

菱山広大 32歳
大工



チャレンジ

志水恭成 57歳
会社員



ありがとう

希彩 24歳
ネイリスト



向き、不向きよりも、

前向き

鈴木聡子

17歳
高校生



ロマンチック

戸部美奈子

昭和生まれ

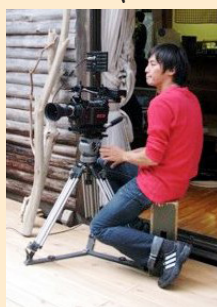
プー



懐かしさと希望。刹那

古屋幸一 38歳

ムービーカメラマン
映画、コマーシャル、
音楽PVなどの撮影



「信じる確かなものが、まだここにある。
ふっとそう思えるような一瞬もある。
たとえば、シヨスタコーヴィチの
弦楽四重奏曲を、深夜、黙って聴きつづける。」

(長田弘「哀歌」〈『一日の終わりの詩集』より)

加納伊都 29歳 バイオリニスト

<http://www.ito-vn.jp/>



ねばり

優香 29歳

幼稚園教諭



中村剛彦の Poetry Reveiw ①「リアリズムに導かれたロマン主義」

「詩」、それがいつ自らの内に訪れ、そして離れ去っていくのか。人はいっ「詩人」になるのか。一時私が傾倒していた黒田三郎の言葉に、「一生だれにも詩人と呼ばれなくとも、一篇のすぐれた私詩をかけたひとがおれば、そのひとは詩人なのだ。」（「詩人とことば」というものがあるが、明らかにこれには逆説が込められている。つまり千篇の詩を書いた人間であっても、その詩が「すぐれた」ものでなければ、その者は「詩人」ではないということである。自分のことを自信をもって「詩人」と思えない私としては、この黒田の言葉にずいぶん勇気づけられる。

ただ注意深く読めばこの「一篇のすぐれた私詩」という表現には実に曖昧な点があることがわかる。まず何ををもって「すぐれた」と見なすのか。特に「私詩」と限られているところを見れば、「すぐれ」ているかどうかは、結局「私」以外に判断を下せそうもない。そうなると自分を「詩人」と見なすか否かは、詩作をやめない限り、他者の評価以前に、生涯を通して自らに問い続けなければならぬほどの困難な問いであり、常に己の詩を見つめ、「これは本当に詩なのか?」「一体、詩とは何か」という根源的な問いまで至ることになる。

やや前置きが長くなったが、実は

映画『ポエトリー アグネスの詩』を観終わったとき、この黒田が提示した困難な「詩人」の定義に対して、これほど見事な回答もあまりなからうと思えたのである。まさにこの映画は「だれにも詩人と呼ばれない」、一人の無名なる女性が「一篇のすぐれた私詩」を書き終えるまでの、ただその一点にのみ物語が集約されているからである。またその「一篇のすぐれた詩」が出来上がる時、つまり「詩人」が誕生するとき、その者はいかなる存在へと至るのかも示されている。

物語の詳細はここでは述べないが、すでに様々なところで紹介されている点のみをあげれば、アルツハイマー病に冒され記憶を失いつつある貧しく孤独な老女ミジャが、幼いころに教師に自作の詩を褒められた記憶だけを頼りに、もう一度詩を書きたいという欲求に駆られ、詩作教室に通いはじめるというものである。彼女の実人生は悲惨そのものである。社会の最底辺を生き、家族からも見捨てられ、同居する中学生の孫は性犯罪へと走り、その賠償のために自らの体をさへ売るのである。言うなれば彼女にとって詩作とは、そうした絶望的な「現実」の人生の振り子を一気に反転させようとする最後の「賭け」と言える。

ただこのように書くときよくある

映画『ポエトリー アグネスの詩』

ヒューマン・ドラマである。しかしすでに「名匠」とまで呼ばれる韓国を代表する監督イ・チャンドンによる演出は、この絶望的な人間の状況を、伝統的なリアリズムの映画文法によって描き出す。もしかしたら目新しい「実験的」な映画が好きな者からすれば、あまりに古典的なわざとらしい演出と映るかもしれない。しかしその「わざとらしさ」の仮面がなければ、この映画は成立し得ない。なぜならあまりに絶望的な「現実」とは、そもそも人々が直視し得ないものであり、映画によってそれを開示することは、あのロッセリニやワイダが発明したりアリズム手法に習い、「映像」「仮象」の限界性の中で緻密に、かつ冷徹な論理で「現実」を「再構成」するしかないのだということをこの監督は知悉しているからである。

うしたら詩が書けるようになるのか」と詩人先生に素朴な疑問だけを投げかけるのである。

このシーンはさりげなく描かれているが、実にこの映画の要になると私には思えた。詩の守護者、詩の破壊者、詩の求道者、それぞれが使用する「詩」の一字は、弁証法的に投げ返される度に、「詩情」「詩学」「詩作品」とその姿を変えている。そしてミジャが追い求める「詩」は「詩作品」は、誰に教わるのでもなく、それをただ書く決断をするまでは決して具現化されないことが分かる。つまりこの「決断」こそが、黒田三郎が述べた曖昧な「詩人」の定義に対する一つの回答であり、この映画は徹底した論理構成によってそれを導きだすのである。

では、ミジャがその「決断」によって「詩人」になったとき、その人生はどう変わったのか。これは映画を見ていただくしかないが、一つだけ私が鍵語として言えるのは、「ロマン主義」である。まるでリアリズムとは正反対にある概念であるが、この映画は、その逆説的手法によって「ロマン主義」が到達する聖性を切り開く。しかしそれは同時に「現実」においては極めて危険な領域への到達でもある。この「詩」の両義性を、一点の弛みもなく正面から見据えた稀な傑作と言える。

早春散歩

中原中也

空は晴れてても、建物には蔭があるよ、
春、早春は心なびかせ、
それがまるで薄絹でもあるやうに
ハンケチでもあるやうに
我等の心を引千切り
されぎれにして風に散らせる

私はもう、まるで過去がなかつたかのやうに
少くとも通つてゐる人達の手前さうであるかの如くに感じ、
風の中を吹き過ぎる
異国人のやうな眼眸まなざしをして、
確固たるものの如く、
また隙間風にも消え去るものの如く

さうしてこの淋しい心を抱いて、
今年もまた春を迎へるものであることを
ゆるやかに、茲こゝに春は立返つたのであることを
土の上の日射しをみながらつめたい風に吹かれながら
土手の上を歩きながら、遠くの空を見やりながら
僕は思ふ、思ふことにも慣れきつて僕は思ふ……

「一篇の詩」を読むことは、「一篇の詩」を書くことと同じ行為である。ここでは、「一篇の詩」を読み抜くことを試みていきたい。第一回は、中原中也の「早春散歩」。難しいことばはひとつも使われていないのに、胸に深く沁みる詩である。

「空は晴れてても、建物には蔭があるよ、」。この冒頭の一行だけで、読む者は、「いま、ここ」ではない場所に運ばれる。この一行だけで、世界は単純ではないことが明らかにされている。「空は晴れてても、建物には蔭がある」。この一行を読むとき、吉本隆明の「固有時との対話」の冒頭の詩句「街々の建築のかげで風はとつぜん生理のようにおちていった」を思い出す。「蔭」が、「かげ」が、詩人によって発見されているのだ。

続く「春、早春は心なびかせ、」という行では、「心なび」く様子が歌われているようであるが、読む者が受け止めるものは「心なびかせ」るものではない。「心を引千切り／されぎれにして風に散らせる」という二行は、その前の直喩の畳用によつて宙に吊り上げられる。それにしても、「我等」とは？

「私はもう、まるで過去がなかつたかのやうに」と転位される第二連が表象する失墜の感情は、読む者と無縁のものではないだろう。「異国人のやうな眼眸まなざしをして、／確固たるものの如く／また隙間風にも消え去るものの如く」と、ある情念が次第に高まっていく語法にも注意したい。ここでは、失墜の感情がただ否定的にのみ語られているのではない。

「さうしてこの淋しい心を抱いて、」で始まる終連は、「寄る辺なき者」の歩行の精神をあますところなく語っている。それにしても、最終行、その措辞は深い。「僕は思ふ、思ふことにも慣れきつて僕は思ふ……」。この一行を読む。繰り返して、繰り返して、何度でも読む。「土の上の日射しをみながら」、「つめたい風に吹かれながら」、「土手の上を歩きながら」、「僕は思ふ、思ふことにも慣れきつて僕は思ふ……」。「思ふ」ということばが繰り返される。それは、どこか遠くへ向かおうとする精神を、含意しているようにも思われるが、実は、「思ふ」ということばが、その表情を微妙に変えつつも、繰り返されるごとに、その「思ふ」という行為は漂白、無化されていく。ここに「存在者」の切なる声を僕は聞いた。

中原中也！僕はまだこの詩人について確信をもつて語ることができない。たぶん、僕のなかにある欠落がそうさせるのだろう。久谷雉が中原中也賞を受賞したとき、はじめて中也の故郷を訪ねた。あまり時間はなかつたけれども、長門峡のほとりを少し歩くことができた。いつか、ゆつくりとこのほとりを歩きたいと思った。もちろん、「溪流で冷やされたビール」を心ゆくまで飲みながら。



私は縁というものを大事にしている。古臭いと言われるが性分である。十年ほど前にミッドナイト・プレスから初めての詩集を出して以来、岡田さんとはお酒をよく飲んだ。大抵は私が一人で眠りかけてしまうのであるが、ふと目覚めると静かに岡田さんは詩や哲学の本を読んでいるのである。

詩に賭ける人生とは何であろうか。これまで多くの詩人たちが詩に人生を賭けて死んでいった。彼らの作品に感動し、私も詩人になりたいという欲求を持ち、そして詩を書いてきた。しかしどうやら私には詩に人生を賭ける覚悟が足りなかった。あれほどに憧れていた詩人にはなれなかった。

しかし、私の目の前で、いまでも詩を求め、真に詩人と呼びうる存在を見出し、詩に人生を賭けている人物がいる。私は勇気が湧いてきて、酔った勢いでこう述べる。なるほど「現代詩」というジャンルは存在し、あまたの「現代詩人」は存在するが、はたして彼らのうち何人が「詩人」であるのか。「詩」を書いているのか。私が自ら「覚悟」と呼んだものは、彼らのように生きるためではなかった。私が憧れつづけた「詩人」とは、いわば絶対的な、根源的な、忘我的な、そして宇宙的かつ超歴史的な存在であった。つまり大ばか者であったわけである。

ようやく人生半分を過ぎて気が付いたのである。「詩」を生きたとは、「詩人」になることがもはや不可能であるという虚無感を抱きながら、それでもなお詩を

見出さんとすることの喜びである。

岡田さんが長く見出してきた詩の道を、私のそのような覚悟でもって支えたいと考えている。一度きりの人生を何に賭けたらよいか、「詩」は一体どこにあるのか、まだまだ学ぶことはたくさんある。

(中村)

○「詩の雑誌 midnight press」を休刊して六年が過ぎた。振り返れば、いろいろなことがあった。そして、二〇一一年三月十一日の東日本大震災から一年が経ったこの三月十六日に、吉本隆明氏が亡くなられた。「わたし」の時間と「わたし(たち)」の時間とが幾重にも折り重ねられて、いまがつくりあげられていることにあらためて気がつかされる。

詩とはなんだろう……？ いまの僕には、「でもね、ドガ、詩はイデーじゃなくて、ことばでつくるものなんだ」というマラルメのことばが沁みる。なるほど、いま、詩らしきもの、あるいは、詩のようなもの(つまり、「ポエジー」?)

を目にする機会は少なくないが、ことばで書かれた一篇の詩が目飛び込んでくるという経験はいまや稀となったという感を深くする。あてどころもなく拡散していく「ポエジー」に対して、凝縮の精神が生む一篇の詩が立つ場所にあらためて立ち返りたい。そう考えて、このたび、midnight press WEB(隔月刊)を創刊することにした。凝縮は、もとより個に、孤に、こもることではない。沈黙が、ことばに対する行為であるように、凝縮

もまた拡散に対する行為である。「詩の雑誌 midnight press」創刊号では、「主題は『一篇の詩』に尽きる」と書いたが、いまはそれに次のことばを加えたい。

「いま、わたし(たち)にとって、詩とはなにか。いま、世界現実にとって、詩とはなにか。そして、いま、ことばにとって、詩とはなにか。——それを考え続けるのが、midnight pressのミッションである」

中村剛彦とはじめて会ったのは二〇〇三年のはじめであった。彼の協力を得て、新しい旅を始めることにした。ザ・ビートルズの歌が聞こえてくる。I get by with a little help from my friends. Yes I get by with a little help from my friends. もちろん、このIはWeでもあり、myはourでもある。どこまでいけるかわからぬが、とりあえず、わたし(たち)は、始めることにした。

○諸事情により、当初の予定より1ヵ月ずれて、六月創刊となりました。ご執筆いただいた諸氏、アンケートにご回答いただいた方々に、御礼申し上げます。今後、無理のないかたちで、ワクにとらわれずに、その時々誌面をつくっていきたいと思います。みなさまのご支援をよろしくお願い申し上げます。第2号は8月1日発行です。(岡田)

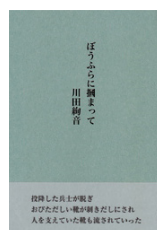
○今号の執筆者

清水哲男 一九三八年生まれ。
瀬尾育生 一九四八年生まれ。

編集室から

○新刊のお知らせ

川田絢音『ぼうふらに掴まって』 2100円



『流木の人』から三年。書かれたことばの後ろにあるものの無量が内蔵された詩集が生まれました。詩とはなにか。その答えのひとつが、ここにあります。

既刊 高橋英司「ネクタイ男とマネキン女」
続刊 浅野言朗「シャープベットの砂時計」
柵野初希「夢の揺りかご」

○midnight poetry lounge のご案内

midnight poetry lounge vol.10
岩田英哉「ハート・クレインの詩作法と解釈」
白い建物とブルックリン橋」6月2日(土) 問い合わせは poetrylounge2010@gmail.com
今後の予定

vol.11 9月1日(土) 水島英己「ロバート・フロストを読む」
vol.12 12月1日(土) 芹沢俊介「吉本隆明と私」

○詩の図書館 <http://www.midnight-poem.com/>
ミッドナイト・プレスでは、ホームページ上で「詩の図書館」をオープンしています。現在、伊藤比呂美、井上輝夫、入沢康夫、川崎洋、川田絢音、清水哲男、辻征夫各氏の初期詩篇を読むことができます。今後、中江俊夫氏などの詩を予定しています。

○自費出版のご案内

ミッドナイト・プレスでは、詩集をはじめとして、様々な書籍の自費出版をお引き受けいたします。どうぞ、お気軽にご相談ください。自費出版のご案内をお送りいたします。